

思春期の危機的停滞と飛躍のメルヘンの表現—眠りの森の美女たちの時間停止—

近藤良樹

1. 「眠りの森の美女」と「野ばら姫」

ペロー(Charles Perrault; Contes de Perrault.)の「眠りの森の美女 La belle au bois dormant」、グリム(Brueder Grimm; Kinder-und Hausmaerchen.)の「野ばら姫 Dornroeschen」では、思春期にさしかかった王女が魔女のかけたのろいによって100年のあいだ眠らされる。お城のなかの人も物も凍ったようになって、そのときのままの姿で動くことを停止し、火までも眠りこんでしまい、おそろしい沈黙が支配し、(仮)死の光景が100年づく。

これは、時間そのものの停止だといってよいであろう。ペローの話では、100年後に眠りから王女を救いだす王子は、祖母の時代の服装の王女を見出し、もう100年も演奏されたことのない古い曲のかなでられるのを聞くのであった。物理的な時間とちがって、われわれの体験している時間は、速くなったり遅くなったりするのみでなく、ときには停止もする。

野ばら姫たちは、眠りつづけるが、睡眠のあいだは、周囲の時間は動いていても、体験される時間そのものは停止している。眠ったときから目覚めまでは、体験としての時間は存在していない。夕方寝て、早朝目覚めたとき、「よくねたが、まだ夕方か」と思うことがある。それを朝だと捉えるのは、感覚的には、朝か夕方かは不明だとしても、まわりの状況から客観世界の時間は進んでいて朝なのだと判断するのである。本当は、まだ夕方と感しているのだが、繰り返される経験から、朝と判断するのである。感性的経験そのものからいうと、おそらくは、そんなに時間がたっているとは感じていないのではないか。幼児のばあい、そういう常識的判断に未だとらわれていないので、ときには、一晩十分に寝ても、起きてから、「さっき寝たばかりなのに、もう朝？」ということになる。眠っているあいだの時間は存在していないのであり、眠る直前から、すぐに目覚めの時間へとつながっているのである。体験としての時間は、眠る直前のままに停止しているということであろう。時間意識は、過去についての記憶と、未来の予期・想像と、現在の知覚によって成り立つのであって、それらの働かなくなっている眠りにおいては、時間意識は成立しない。

動物のなかには、冬眠・夏眠するものがあるが、眠りでは時間は停止しているのであれば、かれらのばあい、その長い間、時間は停止しているか、のろのろとしか動かないということができよう。それが無でなく、とほうもなく長い時間と感じられるのは、当人が無意識になりきっていないで無為に留まりつづけているか、それを見ている周囲にとって、ということになる。「眠りの森の美女」のばあい、それが極端にながくなっているわけである。

だが、特殊な眠り病でもないのなら、眠り姫たちの眠りは、あまりにもながく異常であって、たんなる生理的な睡眠をさすものではないというべきであろう。カルビーノのまとめた『イタリア民話集』(Italo Calvino; Fiabe italiane.)のなかの「眠りの美女と子供たち *La bella addormentata ed i suoi figli*」は、ペローのそれとほぼ同じ内容だが、魔法が実現するのを阻止しようと、あらかじめ、外部から隔離して姫を閉じこめる(にもかかわらず、魔法は実現して長い眠りにはいる)。外部の世俗世界からの隔離、一所への閉じ込めである。これなら、100年は長すぎるとしても2年や3年ならありうる話となろう。いな、生死は問わないで閉じこめるだけなら、200年でも300年でも「眠り」が可能である。

キリスト教世界では200年眠り続けた「エフェソスの眠りの7人」(ごく普通の英語辞典に *the Seven Sleepers of Ephesus*, フランス語のに *les Sept-Dormantes (d' Ephese)*, ドイツ語のに *Siebenschlafer* 等とあるから、西洋ではよほど有名な話になるものと思われる)がいわれている。3世紀のこと、エフェソスのキリスト教徒の若者が迫害をさけて山中の洞窟にとじこもり200年ばかり眠ることになった。長い眠りの後、めざめて町に出てみると、町全体がキリスト教化して様子がおかしく、やがて200年後になっているという事情が判明した。時の皇帝テオドシウスもその洞窟を訪れたりしたという話である(ウォラギネ『黄金伝説』の「眠れる七聖人」参照)。

エフェソスのこの閉じこもりは極端だとしても、2、3年の話なら現実でもありうる。牢獄に閉じこめられる刑罰でいうと、2、3年なら軽いほうであろう。おそらくはこのような閉じこめ・隔離がメルヘンの中での長い眠りの真実ということになるのではないか。ペローの「眠りの森の美女」もグリムの「野ばら姫」も、眠っている間は、いばらなどで覆われて、そこへだれかが入ろうとするとそのいばらがとりかこんで殺してしまい、100年がすぎるまで、だれもは入りこめなかったと言われている。うちに閉じこめ、外からの侵入を拒み、隔離を守り続けたのである。

その眠りから目覚めるのは、いずれも王子（結婚相手）があらわれ、姫が一人前の女性として、成人するときである。カルビーノの「眠りの美女と子供たち」では、眠っているお姫さまを王子が犯し子供がうまれて、その子が母乳を吸うつもりで手を吸い、この手にささっていた眠りの原因となった魔法の「糸巻き棒」の先を吸い出して、それで目覚めたということになっている（イタリアのバジレの『ペンタメローネ』(Giambattista Basile; Pentamerone.) (の5日目の第5話) のなかのターリア姫(Talia)も、同様なかたちで目覚めている)。おなじカルビーノの「眠れる女王 La Regina Marmotta」の話では、彼女は出産時に自然と目覚めることになっている。こどもをつくり育てる能力ができて一人前の成人した女性になったということである。王子やこどもが魔法をといたというよりは、王子の相手になりうるまでに成熟し、こどもが産めるまでに成熟したから、眠り＝閉じ込めから解放されることになったというのであろう。「眠り姫」たちの「眠り」は、成人した女性として世にでるまで、おそらくは、一時期、隔離され閉じ込められたことをさすのであろう。

2. 「ラプンツェル」「マレーン姫」

ところで、眠りではなく、隔離・閉じ込めということであれば、グリムでは、「ラプンツェル Rapunzel」「マレーン姫 Jungfrau Maleen」は、そういうことを強られる話で、眠りの「野ばら姫」と同様の意味をもつのだといえよう。マレーン姫は、好きな王子があって、王さまの決めようとした結婚をことわった。王さまは立腹し、彼女を、入り口なども塞がれて光のさしこまないまっくらな塔のなかに7年間とじこめることにして、天からも地からもひきはなした。7年たってもだれも出してくれないので穴をあけてみると、戦争あたりは荒野になっていた。好きだった王子は、べつのひとと結婚することになっていたが、彼女は、その王子の城ではたらき、最後は、マレーン姫だとわかってもらえて結婚できるという話である。

「ラプンツェル」は、魔女によって、天頂に小さい窓がひとつあるだけの塔に閉じ込められている乙女であったが、どこかの王子がそこにのぼっていき、密会を重ねた。それを魔女が知るところとなり、王子は盲目にされ、ラプンツェルは、荒野に追放されるが、後にふたりは再会できて幸せになるというものである。

光もささない暗い塔へと、世間から隔離し閉じ込めるといえるものだが、おそらく、「眠り姫」も、そういうことだったのではないか。光がなければ、「眠っている」ことに同等と

なろうし、しかも隔離されているのであれば世の動きからとりのこされ、記憶するものがない無の連続にとどまれば、時間も停止した状態になるであろう。「マレーン姫」などの塔に閉じ込める話が、より現実的原型的で、それを誇張する形で「眠りの森の美女」「野ばら姫」はあるのだといってよいのではないか。

動きのない暗やみでは、時間は感じにくくなるであろう。「深い洞窟のなかで何日生活してみても、大して時間感覚は狂わない、ひとには24時間単位での生体時間がある」といったことが言われるが、明かりをともして地上での生活と似たことをするのではなく横たわったまま暗やみにじっとしているばあい、時間感覚は、おそらく狂ってくるのではないか。太陽のもとに育ったわれわれには、太陽の24時間前後のリズムが身についているのは、そうだろうが、感じられる時間は、かんじんの太陽を失ってしまうと、漠然としたものになろう。ひとが時間の動きを感じるのは、ふつうには太陽の動きによる明るい朝・昼と、暗くなる夜の変化を通してであり、短くは、ものが動き変化することによってであろう。何も見えず、何も聞こえず、なにも動くものが感じられなくなって、時をきざむ手がかりがなくなれば、やがて時間そのものは感じられなくなるのではないか。

中国の『搜神記』に「墓にとじこめられた女子」の話がある。彼女は、あやまって墓に閉じ込められて、そのまま10年過ごして出てきたのだが、その間の時間を2、3日のことのように感じたといっている。この話自体は、歴史的な事実であるわけではないだろうが、地中の採掘現場の暗黒のなかに何日も閉じ込められた人たちが、救出されたり自力脱出するというようなことは、たくさんあったはずで、暗黒のなかでの時間の経過がかなりゆっくりとなっていたとか、あるいは、時間経過の見当がつかなくなっていたなどというような体験談が、こういう話を成立させる背景にあったのであろう。何年かまえ、韓国で、倒壊したビルの地下に1週間ほど閉じこめられた者があったが、救出されたとき、まだ2、3日しかたっていないように感じていたと報道されていた。おそらく、そういう閉じこめられた人の体験が昔話にも反映されているのであろう。

われわれは、一日を、日がのぼってやがて沈んで暗くなるという太陽の動きによってかはっている。暗黒の世界では、その大時計がなくなり、時計は、暗やみの真夜中のままとまっている状態になる。いつまでも日が昇らないのである。夜が明けなければ、その日は、とうてい暮れようもなく、一日という時間は成立しなくなる。マレーン姫たちは、そういう暗やみにとじこめられたのである。かつ、それは、世俗的な世界からの隔離でもあって、世俗の時間からとりのこされたままになったのである。つまり、閉じ込められたと

きのままに時間は停止したのである。するとマレーン姫たちは、その間を短時間とみなし、周囲からいうと長時間ということになる。眠りの森の美女の話とは反対になる。

何年も前に住んでいたところへ行ってみたら、すっかり変わっていて、自分だけがとりのこされていると感じるようなものも、同様な時間停止の体験とってよいのではないか。そこには昨日まで、自分のよく知っている人と家があり、川があり田畑があると思っていたのに、それが突如、べつの姿をとって現われるのである。自分のその場所に関する時間は、そこを離れた時のままに「今日の今日まで」停止していたわけだが、現実の方は、その間、どんどん変わっていたのである。記憶は進化発展しないで過去をそのままに停止させる。そこでは、時間は停止したままであり、そのままを想起するのである。時間のなかで刻々と動き続ける現実と、その記憶像との距離は、日に日にひろがっていくばかりである。かれのみが、「浦島太郎」のようになって現われたのである。「今浦島」の旧日本軍兵士「横井さん」や「小野田さん」は、2、30年にわたって日本軍人として終戦の年のままだに停止して、その年から一気に現在へと帰ったのであった。

なお、「眠り」のばあいは、正確には、感じられる時間そのものが存在しなくなっているのであるが、隔離されているところには、時間そのものの体験は存在しており、そのなかでの固有の時間は流れていく。しかし、それから隔離された記憶の世界の時間は、停止状態になる。それは、隔離された時点で停止して、それ以後のかかわりはたたれているので、そこまでの記憶を反復するのみである。その隔離されて停止した時間は、その中間のないままに一気に、その隔離から解かれた時へと飛躍することになる。きのう（実は10年前）のおさない弟が今日は、突然、髭づらの青年となっていてびっくりさせられるわけである。

眠り等の時間停止では、時間はないので、その記憶に存在しない時間は、ないままで、そのときにいたる以前の記憶を、めざめた現在と直結する。その間の断絶は無なので感じることなく、まさしく「ない」ものとして、前後を連続させて、間断なく時間を進めていく。そして、まわりの世界の時間について、自分には無なのに、その間があって、それだけ、急速に、時が進んでいると感じることになる。その無の期間が10年であれば、10年、突然に進んでしまっていると感じる。ただし、世界の方の時間がふつうに進んでいたとわかるとともに、自分の方が、その間、無になり、時間が無にとどまって停止していたのだと反省するにいたり、つじつまをあわせることができるのが普通であろう。

3. 少女隔離の習俗

プロップ『魔法昔話の起源』は、昔話を歴史の原始的な事実の記憶なのだとして、昔話のなかにある不可解な事柄を原始的な生活のなかからとらえなおそうとしているが、「眠り姫」とか「マレーン姫」の話は、そういう方面から見る必要があるように思われる。プロップは、フレイザーをふまえつつ、眠り姫のような隔離される形式は、かつて生理時に行なわれていた隔離を反映しているとする（ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の起源』斉藤君子訳 せりか書房 1983年 40頁参照）。

他方、フレイザー『金枝篇』（J. G. Frazer; *The Golden Bough*. ed. by R. Fraser. Oxford University Press. 1994.）はというと、その「第4篇 金枝」の「第2章 少女の隔離」において、世界各地に少女を一定の期間、隔離する風習のあったことを論じている。少女は、その隔離の期間、「大地にふれたり」「太陽を見ること」を禁止されていたのだという。「月経」をみることになった少女たちは、何日か、あるいは、数ヶ月、ところによっては何年もの間、狭い空間に閉じ込められていたという。光がさしこまないように暗くした、地面からはなれた部屋とか檻、あるいはハンモックに隔離されつづけたとのことである。その間、断食させられたり、人との接触は最小限にされ、あるいはまったくものを言ってはならない等のタブーも課せられていた。してもいいことは、「紡ぐことと織ること」ぐらいに限定されていたというところもあったようである（Frazer; *ibid.* p. 691）。

そのようにしたのは、フレイザーによると、「月経の血への恐怖」とくに初潮におけるそれを恐れたことによるのだろうという（cf. Frazer; *ibid.* p. 698）。われわれのいう「血の不浄」である。その汚れによって、この世界が汚れることをさけるために、隔離したのだ。暗いところへというのは、太陽から隠し、天から隔離するためであり、地から離してハンモックにつるしたり、檻にいれたのは、彼女を大地から隔離して、大地が汚染されるのを防ごうとしたものだったというのである。月経中の女性を見たものは、白髪になるとか、彼女に触れられた酒は、酔になってしまうとか、食物は腐ったり、作物が、漁がだめになる等といわれていて（cf. Frazer; *ibid.* p. 702f.）、そういうことにならないように、血の不浄の中にある女性は、この世界の一切から隔離される必要があると考えられていたのである。

その隔離は、他方では、「他のものたちの安全のためと同じく彼女自身の安全のため」（Frazer; *ibid.* p. 703.）でもあった。このタブーを犯した女性は、盲目になったり、蛇に命をとられることになる等といわれていた。かりに彼女たちによって天地が汚されること

になったとしたら、神々は、彼女に復讐することになり、他の人々も彼女をそのままにしておかないであろうことはいうまでもない。その禁をやぶって彼女が大地を歩いているのを見られたとしたら、その後にかかる不幸な事態はすべて彼女のためとみなされ、彼女はその責任をとらされることになるはずで、そういう非難・報復から保護するためにも、隔離しておくことが必要となっていたのであろう。

なお、プロップは、フレーザーをふまえつつも、眠り姫の「眠り」は、「死」の意味を第一義的とすると考えている。通過儀礼における死であり、死を通しての成人女性としての再生である（プロップ『同上書』127頁以下 参照）。しかし、「死」を示すのなら、それ以前との断絶をするだけでいいのだから、1夜の隔離でも十分であり、それが100年というのでは長すぎるのではないか。儀礼的、形式的な「死」の面もありそうだが、やはりフレーザーの言っている、「少女の隔離」が主要な背景になっているというべきではないか。この隔離・閉じこめ自体については、プロップは、フレーザーとちがって、天地を守るためであるよりは、主要には、悪魔的なものから少女の方を守るために、外から保護するために閉じこめたのだという。恐怖すべきものから少女たちを守るのである。が、それでも、さらわれていってしまうのであり、危険にさらされることになりがちだったのだと（プロップ『同上書』42頁以下 参照）。

いずれにせよ、高い塔の、窓もないようなところに閉じ込められていたというグリムの「マレーン姫」などの話は、現実の素朴な世界のひとびとが少女を大地から離して太陽から隠された暗いところへ隔離する風習をもっていたという事実によく合致しているわけである。一見荒唐無稽なメルヘンは、荒唐無稽なことを語っていたのではなく、かつての習俗をよく残していたのである。

現実としての少女の隔離の風習があって、それを「マレーン姫」などの話は、正確に再現して塔にとじこめているのであり、「眠り姫」は、その現実を背景におきつつ、そのあいだに感じられ体験される心的内容に重きをおいて「長い年月眠る」ということになっているのであろう。

「眠りの森の美女」「野ばら姫」あるいは「ターリア姫」（バジレ『ペンタメローネ』（5日目の第5話）等が「糸巻き棒」で手を傷つけたというのもそういう歴史的記憶の痕跡とみなされるべきなのであろう。つまりは、初潮をむかえた少女の隔離という風習なのであるから、それによる「出血」が想像されてしかるべきなのであろう。バジレ『ペンタメローネ』（2日目の第8話）の話では、リサ姫(Lisa)が母親から「櫛」で髪をくしけずって

もらっていて、それがささってというのが、これも、おそらくは、初潮、破瓜の「血」を想像してよいのであろう。さらには、もっと積極的には、男子の割礼のように、女子でも女陰の一部を傷つける風習をもつところがあったというから、櫛や糸巻き棒で突き刺してというのは、それを指し示しているものとも考えられる。

こういう隔離におけるその時間の感じ方は、「眠り姫」では、時間は存在しなくなっていて、無時間ということになり、「マレーン姫」では、停滞的か停止した時間ということになろう。現実の風習としての少女の隔離では、彼女たちは、その隔離の程度によっては(世間との途絶状態にまでなっておれば)、やはり「今浦島」になって時間は隔離の時点に停止していることになろう。が、かならずしも、そこまでの極端な隔離には、なっていなかったのが普通のように、月のない夜は出ていいとか、直射日光にあたらなければいいということになっていたところもあったようである。それでも、周囲のひとびとの成長とか変化から一定程度は離れて、一所にとどまって半ばは無為に停滞した状況にある点からは、その時間はやはり停滞気味と感じられていたことであろう。

なお、「白雪姫」の話も、毒りんごを食べて仮死状態になり、「眠り姫」的なものをもつ。「若者小屋」(7人の小人)に泊まったりもして、古い風習の痕跡が濃厚である(わが国でも、ところによっては、庶民の未婚女性は、明治になる頃までは、村の若者の共有だったという。白雪姫のいた地方も、そんな状態だったのであろうか)。ただし、「野ばら姫」などのような隔離を中心に話が展開するものではなく、継子いじめが中心であり、少々、入り組んだ話になっているというべきなのであろう。

4. 男子の隔離

グリムでは少女のみではなく、男子もそのように隔離されている話をもつ。「鳴きながら跳ぶひばり Das singende springende Loeweneckerchen」では、ライオン王子は、光にあたるのがタブーとなっている。彼は、昼はライオンの姿にされて寝ていて、夜のみ人間にかえることになっている。そのライオン王子は、妻の姉の結婚式にいったとき、ろうそくの光があたっても駄目だと、広間を木でかこって光がささないようにしてそこに入っていた。が、ひとすじの光が体にあたってしまい、そのとたん、「7年間、鳥になっていなくてはいけないのだ」と、どこかへ飛んでいってしまった。妻は、幾多の苦難をのりこえて、彼を救いだし、その後やっと二人は幸せに暮らすことができるようになったという話である。

「鉄のストーブ Der Eisenofen」では、王子が大きな鉄のストーブ（かまど）のなかにとじこめられて森のなかに放置され、ながい年月くらしていた。そこへお姫さまが森に迷い込み、閉じ込められている王子が、森からお城へとかえれる道を彼女に教え、そのかわりに、お姫さまは、あとで森にもう一度来て、彼をストーブから救いだす約束をする。帰城した姫は、自分ではなく、粉ひきの娘や、豚かいの娘を森にやってストーブを削らせたが、なかの王子はそれを見やぶり、結局、姫自身が行って、ストーブに穴をあけて救出する。二人はおたがいに気に入って結婚しようとするが、すぐにはそれはかなわず、苦難をへてのち、やっとハッピーエンディングになるというものである。

女子とおなじように、男子も、開放的な天地から隔離されて暗い場所に閉じ込められたのである。フレーザーによると、少女の隔離に似たことが男性のばあいも、とくに王さまや司祭についてしばしばあったという。かれらも大地に足をつけてはならないし、太陽の光にさらされてもならないのであった。天地から隔離されたのである。だが、その理由は、少女のばあいとは反対だった。少女は、「不浄」ゆえにだったが、王たちは、その「神聖さ」ゆえにそれらから隔離されたのだという（cf. Frazer; *ibid.* p. 703f.）。その神聖なものが異常なかたちで放出されないように、安易に外的世界へと霧散してしまわないようにと、閉じ込めたもののようである。

神聖な王や司祭を、逆に、汚れた大地で汚さないように、あるいは、魔物にさらわれたりすることがないようにと、これを守るために閉じこめたということもありそうである。古代エジプトの物語に「野ばら姫」や男子の隔離の話に相当する内容のものがある。それによると、のろいが実現してはいけないからと、王子は、生まれてからずっと石の館に閉じこめられるのであった。（しかし、やがてそこから抜け出し、同じく塔に閉じこめられていた王女に求婚していくというものである）（矢島文夫編『古代エジプトの物語』社会思想社 1974年「運命を定められていた王子」）。

古くは、多くのところで、わが国でもそうだが、成人するための通過儀礼として、「若者宿」へと隔離したり、一度「死」んで生まれ変わってという再生の儀式がなされていた。女子と同様に男子も閉じこめられたり、肉体を傷つけられたりしていたのである。グリムの「鉄のストーブ」等の男子の閉じ込めの話や白雪姫のなかの「森の七人の小人」の生活は、そういうかつての風習を物語っているものと解釈されてよいのであろう。

5. 日本のばあい

われわれの昔話には、すくなくともポピュラーなものとしては「眠り姫」の話は存在しない。男子のばあいは、有名な「寝太郎」(＝ものくさ太郎)の話がある。「なまけもの」の代名詞であって、かならずしも「眠る」ものではないが、ときには「毎日寝ていた」「三年目に一度目をさます」(関敬吾編『日本昔話大成』角川書店 第2巻 310頁参照)といわれて「三年寝太郎」などと形容され、真に眠っていた話にされる場合もある。寝たあととは、「まめ」に一仕事して成功するものとなっている。これに属する話の多くは、のちに策略を用いて金持ちになり幸福になったと語る。狡知に富む者の話として、『なにがこわい』『田のきゅう』とか『天福地福』(関編『同上書』第9巻 85頁、第3巻 252頁参照)というような、「お金が恐ろしい」とだまして、これを敵からなげいれてもらったという話の主人公になっていることもある。「なまけもの」で「ずる賢いもの」が得をするという話になっているのだが、「ねる」ことの意味が「なまける」ことではなく、まさしく「寝る」ことだとすると、めざめた日常的現実とはべつの世界のなにかにかかわり、あるいは、擬死あたりもかかわる話になるのかとも思う。

その長い眠りは、生の停滞そのものであり、鬱病的に時間は停滞していると見てよいであろう。その間、現実からは浮いているといってもよい。その寝姿は、なまけもの姿に描かれているが、あるいは、スランプ状態ということであろう。フレーザーのいう神聖なものとの隔離としての王の隔離の話などは縁がなさそうである。プロップは、眠りを死とみて、再生のための通過儀礼のありかたがそこに示されていると見るが、寝太郎には、それはある程度いえそうに思われる。

最近、不登校の話が多いが、学校へいけない精神状態になった子供は、自分の部屋にとじこもって何年もすごすことがある。しかし、かなりのものは、その長い「三年寝太郎」的な閉塞的状态のあとでは、再び社会に出ていけるようになり、なかには、既成の枠にとられない者として大成するものも出て来ているようである。

わが国には、「眠り姫」に類した昔話は、存在しないか、すくなくともポピュラーなものとしてはない。それは、それなりに理由があるはずで、稲作に「早乙女」が欠かせないことに象徴的に、生産活動の場からながくは隔離しておけないということだったのかもしれない。「血の不浄」には、やかましく、つい最近までところによっては「産屋」「月経小屋」が村には隔離病棟のように存在していたというから、初潮にはじまる月経時の隔離に関しては、無関心ではなかったはずである。が、それは、何年も眠るというような生活全般からの顕著な隔離とはならなかったのだろう。宮中でも、「月経」のときは、一日休むだ

けと軽く扱っていたとかいう。勤勉を尊ぶ風土のもとにあって、しかも女子の労働を求めるわれわれの農耕社会では、女子は、「野ばら姫」や「寝太郎」のように、眠りこけて無になってなどおれなかったのであろうか。

眠り姫の原型としての塔に閉じ込められる「マレーン姫」のような話に相当するものも、われわれには、それにぴたりと一致するものがなさそうである。ただ、「瓜子姫」の話には、そう見てもよいような場面がある。爺婆が出かけているあいだ、部屋に閉じこもって「はたおり」をする場面がそれである。ときには、その場所は、二階だといわれる。特別に隔離したことがそれにこめられているものとも考えられる。

その二階に閉じ込められていた瓜子姫には、天の邪鬼がとりつく。少女が思春期・破瓜期になって、異常状態におちいったということであろうか。それまではいねいに機織りしていたのに、乱暴に音をたてて織ったり、爺婆のもってかえった食物を不作法に食べるなど、思春期の荒れたすがたを彷彿とさせる叙述をもつ。この話は、その成長の飛躍がうまくいかず、結局は、天の邪鬼がとりついたままに死ぬことになっているのが普通である。プロップは、少女の隔離は、そとの恐ろしいものから守るためにされたのだと考えていたが、「瓜子姫」の話は、そとの恐ろしいもの=あまのじゃく(=内なる狂気)が、やはり襲ってきて、この姫をなきものにしてしまったのである。